



會

1 7 7

1955年1月

සමහරක් ස්ත්‍රීන්ගේ

望月達夫

昨年三月、本會が編した『マナスル』を讀まれた人の中には、右の一節(同書五頁)を記憶されている人があるかもしれないが、ほとんど後光がさしていると思はれた、その公式の通牒なるものについて一言書いておきたいと思う。

それは云うまでもなく、運よくネパール入國に成功した西堀氏の努力が、幸いにも實を結んだ結果によるものなのだが、山岳會の手に入つた當時、大切なものだということ、で、早速數多くのコピーをとり、必要な方面はすべてそのコピーで、必要ならジナルは當時準備委員の末席だつた私の勤先の金庫に保管しておいた。それにはネパールからの公文を見られた人なら記憶している筈の、あの一目

見れば忘れられない細かい模様のある、かなり大きなマークが黒で印刷されていた。このマークは其後われわれにはフアミリアなものとなったが、後から来たものによると、黒のときも赤のときもあつたように思っている。

私は、これは將來の日本のヒマ
ラヤ遠征にとつて、少し大袈裟に
云えば歴史的なしろものになるか
と思ひ、一度は「山岳」とか「會報」
に發表しておいた方がいゝと思ひ
つゝ、次々に行われた登山隊の準
備に忙殺され、ついにその機を
失してしまつた。

ところで、何ヶ月かを金庫にねむつていた、そのオリジナルのことだが、一九五二年秋の今西踏査隊が出發して間もなく、カルカッタでネパール入國のエアパミッツが拒絶されたというニュースが入り、今西隊長からとも角例の通入のオリジナルを至急送付されたという連絡をうけたため、會は折返し隊長に右を空送した。その後右はどうなっているのか、今も今西氏が保管されているのか、或は會の方に戻つてゐるのか、それは知らない。何枚かつた筈のコピーも、其後私が東京を離れたりして、今は私の手許にも残つていない。

しかし、こうしたものは矢張り日本のヒマラヤ遠征を考える場合の資料として、當然残すべきものなのだから、私自身忘れぬうちに書いておくのだし、餘り關係者の記憶が薄らぐぬうちに所在をつきとめておくべきが本當だろう。

一九五二年からはじめられたマ

ナスル遠征も既に四年目を迎へ、その間三回の隊を派遣したことは本會としてもまず精一杯に近いことだつたと思う。従つて、まだ登頭がすんでいない現在では、今までも同様後を振りかえる仕事つまり後始末に關することはとかく後まわしとなり、次の遠征の準備に忙殺され、それに主力が傾注されるのもやむを得ない。だが、一回一回の隊が將來したものをその都度整理しておかぬとしたら、隊に参加し得た極く少數の人々にはとも角として、これを支援しこれに期待した多くのの人々にとって、遠征に對する氣持を正しく育て、ゆくことに大きな支障となるのではないだろうか。

マナスルの頂にたつということが、今はまず考えるべきすべてでたつたとしても、それだけで終つたとして、矢張りさびしいことではなないだらうか。エヴエレストにしても、ハントの著があり、素晴らしい写真集が出来、映畫が出来、素晴らしいエヴエレストもノイズもエヴエレストも、それぞれに立派なものを書き残している。そうしたものを通してはじめてわれわれには益々その登頂の眞に素晴らしいことがわかる。エヴエレストの頂にたつたという事實の報道を受けたゞけの気分とは甚だ違うように思われる。殊に日本の場合はヒマラヤの經驗が少ないうのだから日本人の手になるヒマラヤはもつと書かれる必要があらうし要望もされていよう。そうした意味だけでも今西氏の『ヒマラヤを語る』は、内容が一度發表された部分が、多いといつても、出さるべきもの

だつたと思われる。

後始末といえば、頭に浮んだのは一つ二つのことだけで、遠征隊が將來したカラー・スライドや寫眞のフィルムの整理保管も大切な仕事のひとつ。村木君が手がけていたマナスルの寫眞測量の續行も是非やつてほしいことのひとつである。昨年のガネツシュで映畫「白き神々の座」が出来上つたことは、特筆すべきことだと思ふことは、それにひきかへ報告書の話は何も聞かれない「山岳」だけで足れりとせず、簡単なものでもよい。例えば ハントの Our Everest

Adventure のような寫眞を主にしたような本を作つたらどんなものだろう。こうした希望は私一人のみではあるまい。もつと参加した人々に、そうした意欲と熱意がなければ、はたの者がいくらやきもきしても仕方のないことだが、東京を離れて約一年、その間こうしたことがどのようにはこばれているか知らないが、仄聞した所では餘り華々しく進められてもいないようだ。参加した人々が全員と云ふないまでも、もう少し意見なり感想なりを發表してはしいと思ふ。仲間の間だけで何回檢討會を繰返しても、それだけでは一般に少しもわからない。一般はどうでもいゝという氣持なら、廣い基盤の支援をうけて出かけることは考へるのだし、面倒くさいとか忙しくてその時間もないという理由ならば、そういう人ばかりを隊員に選んだことが間違ひになりそうである。學術探檢の報告が Scientific Results of the Japanese

富士雪崩の批判

金坂一郎

昭和二十九年十一月二十八日午前十時四十分頃、富士山の吉田口に大雪崩が生じた。遭難したのは登行中の慶大醫學部山岳部員三名（六合五勾小屋と七合小屋の間にて）東大山岳部員十一名（夏道を七合小屋に近接中）及び下降中の日大山岳部員二十四名（七合小屋直下数十米の凸斜面にて）で死者、行方不明者は慶大二名、東大五名、日大八名であった。

雪崩の規模は富士の冬雪崩としては稀有のものに属し、大澤九合目附近よりツバクロ澤三合二勾位に達するもので、標高差千六百メートルの長さ四千米に達する。大澤に流入したデブリの末端は約三合五勾。この雪崩は生還者の報告によると引きつづき二回襲つたものであるが、當日の雪はこれだけではなく、ツバクロ澤はもとより須走口方面や大澤の西方にも大きなデブリが認められた。

事故發生の報に接するや三大学においては直ちに救援隊を派遣、五合目佐藤小屋及び吉田浅間坊に現地本部を設け、部外の應援をも得て、十二月四日まで捜索にあたつたが、東大生四名の遺體を發見したに過ぎなかつた。

今回の遭難については登山界はもとよりのこと、地元官民、自衛隊を始め各界の絶大なる御協力を得た。中でも目覚ましい活躍をして下さつたのは、本會學生生部、山梨山岳連盟その他の登山生で、その特技を發揮して作業に遺憾なくした。本會學生生部を通じて救援作業に御協力頂いた大雪山山岳部は、青學、中央、學習院、一橋、法政、慶應、同工學部、明治、武蔵工大、日本醫大、立教、埼玉、芝浦工大、東外語、東藝大、東経大、東教大、東農大、東理大、早稲田等の二〇校、出動人員一五五名、延三八八名に達した。

今回捜索に従事した人員は、實働だけで延千三百名を超えた。また作業には警察犬や地雷探知機の應援まで得られたが、その効果は空しかった。雪崩の規模が餘りに大きかつたのだ。恐らく數万トもあかつたと思われるデブリでは千や二千の人員をもつては、焼石に水に過ぎない。

今回の雪崩を豫め察知して、これを避けることはできなかつたろうか。ここでまず明らかにしておかねばならぬことは、單なる議論としては、雪崩を豫知することと雪崩を避けて登高することとは全く別の問題であることだ。しかし登山の場合には兩者を切りはなして論ずることはできない。ここに積雪期登山の一つの難しさがある。譯だが、以下においては當然登山の問題として考えることにする。

富士に雪崩の危険はない譯ではない。春の底雪崩とともに、小規模な冬の表層雪崩の危険は、一應冬富士を研究した人ならば知つてゐる筈だ。日大山岳部の場合、今

回は山行前に雪崩を豫想し、研究會の問題としてとり上げておきながら、なお雪崩にやられてゐる。今回の場合現地の状況をよく知つていて、各種の條件について雪崩に關する部分だけを抽象的に机上に再現して検討するならば、一應の冬山の經驗を有する人なら當然雪崩の危険を感じたであらう。そして具眼の士はなお今回のような大雪崩をも豫測したであらう。

しかし、もし人が六合目から七合目に至る夏道尾根に立たされたとしたならば、まず大部分の人は雪崩に對しては比較的安全なりと判斷するであらう。このあたりの雪崩の流れに關する研究を、豫め行つていた人は少いであらうが、實は雪崩は大澤本流ではなく、まともにこの夏道尾根を襲つたのである。富士のスケールが餘りにも大きかつたのだ。

また現地で行動していた人達は數米先の積雪状態はほとんど未知な中で、技術の練習、風雪に對する訓練等の問題をひかえながら、アルピニズムの練習に勵んでいたグループである。しかも天氣豫報にも現れなかつた激しい風雪に襲われてゐる。若い人達ならばむしろその方に氣をとられるのが當然である。もしそれ以上の判斷力を有する人がそこにいあわせて、適切な處置をとつたとしたならば、遭難はあるいは豫防されたかも知れない。しかし若い人達も精一杯やつたにちがいない。ただ運が悪かつたのだ、という感を深くする

人間の生活というものは、いつ危険が襲いかかるとも知れぬ不安定な條件の克服ともいへよう。アルピニズムもその例外たり得ない。アルピニズムに冒險のともなうことが避けられないものとするれば、今回の遭難者は、登高と事故防止との際どい兼ね合いにおいて敗れたということができよう。

結論として、今回の失敗を單なる知識や經驗の不足によるものと斷じることが、早計ではあるまいか。問題はむしろ一般的な人間としての能力に關するよう思われる。何ものが語ることをも素直に聞く謙虚さと、何ものにもさまたげられることなしに現實を直視し得る自由な精神と、果斷なる決斷力、實行力。これらは不斷の決斷練習によつて得られるものであるが、このような優れた能力をそなへた人だけが、今回のような異常な事故をも豫防し得るのであるまいか。

今回の事故は犠牲が大きかつただけに、我々に與えられた教訓も大きい。雪崩の實體をよくつかんでいない現在、これからは學ぶべき多くのことに氣がつくであらうが、ここで二、三の問題にふれておきたい。

雪崩一般の問題について、現役登山者の判斷能力はどうか。戦後の人たちは確かに戦前よりも容易に、高度の登山にはいりこめるようになった。これは登山の進歩（危険の減少は意味しない）というこはできる。しかし極地法のような集團行動に成果をあげるため、雪崩の出るようなルートに安易に避け、高地における行動に没頭

＝ 一頁より ＝

Expeditions to Nepal Himalaya 1952-1953, vol. I. Fauna and Flora and として近く發刊のはこびにあることは、會としても喜びとせねばなるまい。

近着の Mountain World, 1954 には高木君のマナスルの記事が寫眞二葉と共にみまがらわれているが一九五四年版のヒマラヤン・ジャーナル第十八巻の方は「山岳」からの轉載のみで三田隊の記事はない。海外のこうした主要な報告にも、繁をいわず適時、遠征の報告を出して行くことも、日本の遠征の長い將來を考へる場合、大切なことだと思ふが、どうだろう。

先般の毎日新聞によると、サマの民情は今年はずしと悪くなさそうだが、これが間違いないでなければ非常な幸と云わねばなるまい。しかし、隊長の決定、今年の隊の構想がどうなつてゐるのか時日の足りないことが、またしても心配の種とならぬよう希望するものである。

(一九五五年一月)

寄贈図書

蘭 譜

一月三日に昨秋物故された名譽會員加賀氏未亡人より故人が心血を注がれた洋蘭の畫譜の寄贈を受けた。加賀さんの洋蘭栽培は世界的なものであり、この蘭譜も又洋蘭栽培上國際的に貴重な資料の由である。

するときは、雪崩についての教養が深まる筈はなく、むしろ雪崩に對する關心がうすくなるような傾向を生じないであらうか。

また一般的にいって、現在我々が雪崩について知っていることは二十年前とくらべてほとんど進んでいない。我々は登攀技術や生活技術にはかなりの自信を持っているがこと雪崩に關してはその知識はまことに粗末で、ひどいことになる。雪崩の着眼をもつて冬雪崩を論じたりする。異常な悪天候も我々の手に負えない強敵であるが、それにも増して決定的に恐しい雪崩である。この邊で頭を入れかえて勉強しておかないと、遠征にでも出ようといふときになつて、はつとするやうなことになる。

例えば我々は雪崩の流れについて、無意識のうちにこれを水の流れたととる。一面これは正しいしかし改めて考えて見れば、雪の流れと水の流れとは當然別のものであらうし、我々の経験からもこれはかなり違ふものやうな気がする。學者の研究としては進んでいるかも知れないが、今我々はこれについて何の資料も有しない。そして漠然と川の流れ方を雪崩にも豫想して、たびたび状況判断を誤っている。

富士の部分的冬雪崩は、一部の人達にはよく知られていたことではあるが、今までこのようなことも知らないで過ごした人がありはしないだらうか。六合目と七合目の間の夏道を安全な尾根と考へていた人はいないか。八合目から頂上に至る夏道を緩傾斜面と考へていた人はいないか。ここは地圖で測つ

ても三十度を超える所で、遭難時刻頃こでも雪崩にあつた人達がある。實際富士山は雪崩の常識からいへば、森林帯以上はほとんど全山怪しいと見なければならぬ筈だ。しかもスケールは桁はずれて大きい。六合目と大澤源頭との標高差だけでも千三百米ある。實は我々とても今回の雪崩を見て、改めて富士のスケールの大きさを再認識したやうなものだが、桁はずれて量の大きいということは、質的にも異常な現象が起こる可能性が大きい。

スケールが大きいと登山者の眼はくまなくときかぬ。また一個所から見ただけでは、正しく地形を判断することもできない。これは今回各方向から撮影された數葉の航空寫眞を比較し、實地偵察をして痛感したことである。下から見ただけで、山が安全かどうかという判断は實に難しい。これは今後の搜索作業の危害豫防について、特に留意すべき點である。

もし今後とも今回のやうな大雪があれば、富士には再び大雪崩の危険がある。そしてもしも從來見なかつたやうな大量の雪が、春まで持ちこされたとしたらば、今回に數倍した底雪崩が出る可能性がないものでもない。

今後富士の氣象状態が平年なみにかえるとすれば、富士における危険は再び滑落が主となる。雪崩に氣をとられて、歩き方、滑落阻止、強風、寒氣等に對する訓練を忘れてはなるまい。

救援の問題について、このやうな大事故に對する何らかの組織を作つておく必要はないであらうか

實は我々はデブリをゾンディーレすべく鐵棒を、現地を偵察して始めて發した始末だ。今後は少くとも今回製作したゾンデ程度は要求があれば直ちにどこへでも急送できるように、準備しておくつもりである。

今回の作業の危害豫防については、我々としてはできる範圍の手段をとつたつもりでいた。しかし今になつて考へれば全くの冷汗なので、今後の作業の安全を期するため、今我々は頭を痛めている。日本の冬山は難しい。これを眞

富士山雪崩私見

昭和三十九年十一月二十八日富士山雪崩遭難事件が起つたので、直後十二月二日中央氣象臺に行き當時の富士山頂氣象狀況を無電暗號で調べ、更に十三日御殿場で藤村富士山頂測候所長と會見、當時の詳細な氣象記録が判り、又實地踏査直後の同氏と意見の交換八時間に行つた。十四日中央氣象臺で相談所や豫報官室の方々と當時の一般氣象狀況(特に八丈島附近で異狀發達した低氣壓と富士山との關係)などにつき意見を交へ、十六日山と溪谷社座談會で日大生還者とも話し二十五日夜は拙宅白樺山荘に日大、東大、慶大生還者を主としOB(ヒマラヤ隊員を含む)も混入十五名參集、四時間半に亘り小生より富士山の雪崩につきお話しする一方現地の情報を相當詳しく知る事が出来、翌二十六日は同

面目に研究することが、そのまゝヒマラヤに通じる道だとは、よくいわれることであるが、ただヒマラヤを相手にできるという程度の能力では、日本の冬山を確實にこなすことは難しいかも知れない。これが今度の事故を見ての、私の結論である。

(附記) 本會では今回の事故につき、松方副會長を委員長に富士山雪崩調査委員會を組織した。今回の雪崩に關連した事項特に搜索關係及び今後の雪の狀

廣瀬 潔

じく生還者登歩溪流會の橋本正路氏(當時七合にいた)と石井清氏(當時七合にいた)及東大の原健彦氏(當時のリダー)も拙宅に來訪、現地の事情は更に分つて來た。

(一)

いずれ詳細確實な報告が關係者から發表されるが、今迄に判明した範圍で私考するに、餘りにも異狀な氣象狀況と氷雪状態にはたゞ驚くばかりである。そう云う異狀の條件が集つたことあんな異狀な雪崩が発生したのだ。私も永年富士山の雪崩について調べて來たが、四、五月頃の底雪崩は別として、初冬の新雪層雪崩で、これ位大きいものは文獻で見たこともなければ、人から聞いたこともないし、私自身見たこともない。こゝではその異狀の條件を一々詳述する紙面もないので簡単に項

態の變化、あるいは富士雪崩一般について、各位の資料、雪崩等大小を問はず、是非御提供下さるようお願いしたい。また三大學搜索委員會では富士吉田駅及び五合目佐藤小屋に、右の目的の記入帳を設けつづけている。なお今回の雪崩に關する地形上の考察、雪崩の規模及び特異性等については、雑誌「岳人」二月號に概説した。併讀頂ければ幸いである。

目で列挙するに止める。

A 異狀雪量

十一月末の富士山頂附近は大體氷が堅雪であるのに、當日は七合附近で軟い新雪が五〇センチ位、屏風尾根六合附近一メートル半位あつた。従つて大澤上部吹溜地帯は一、二メートル位の積雪量は想像し得る。それが原則として氷面又は堅雪面(傾斜大澤上部で三〇度以上、側面では局部的に四〇度近い)の上に乗つていた(これは雪崩の發生又は擴大に大きな要因をなしたと思はれる)。

B 異狀積雪層

軟い新雪層の内部でも、七、八合附近では上部と下部が軟かく、中部がやゝ堅い複雑な雪層を示している箇所もあつた。

C 異狀降雪質雪質

當日富士山としては高氣温のため降雪は「ミゾレ」となつて水分を含んだり「アラレ」が混入したりした。又普通の雪の外、針狀の雪(小氷柱)が降つた。又山頂の霧氷附着の狀況から見て、普通の雪片にも小粒の氷玉が着氷してい

た事も考えられる。これらが積雪となつた場合、アラレは廻轉し易く、針状雪や氷玉のついた雪は滑りやすく、水分は滑剤となるので頗る流動性のある積雪質を形成し崩れ易い状態であつた。

D 異状風位

東海道沖低気圧のため前夜来南東風が吹き早朝迄續き、朝は東風雪崩發生時北東に轉じ、大澤ツバクロ澤上部に眞正面に當つた。平常は北西の季節風と上空の偏西風のため西寄りの風が吹くのが原則である。

E 異状気温(上昇)

南東風の影響で、南方洋上の高温多湿の氣塊が富士山に來たので気温は異状に上昇し、山頂は當日早晩から雪崩發生時迄大體零下七度か五度位で、平常に比べ十度近い高温、從つて六合附近では零度に近く、登山者は異状気温を體感出来る程であつた。このため湿雪は氷化出來ず、表層の湿潤新雪はゆるくて崩れ易くなつてゐた。

F 異状風速

東海道沖低気圧の影響で、前夜來風速は増し、當日は零時から六時迄山頂では南東の平均風速二十五メートル乃至三十一メートルあつた。朝は低気圧の弱風圈に入つたため一時風が落ち、九時には東風で十一メートル迄下つたが、十時北東風に變つて、(1)北東風の強風圈にはいつた事、(2)低気圧が異状發達した事(あんなのは十年に一回と云うもので台風位の強さ)(3)今迄南東風でさえぎられていた大陸高気圧から來る風が加わつた事等で平均風速は一時に増大して一舉に三十九メートル(瞬間は六

〇メートル近い)に上つて、大澤ツバクロ澤上部に眞正面に當つたため、風壓は著しく加わり、十時半頃雪崩發生を見たらしい(因に當日の平均風速の最高は十八時四十三メートル)

以上の様な異状の氣象狀況と氷雪状態によつて、雪崩は發生したものと思はれるが、あれだけに擴大した要因は、(1)十一月の富士山には原則として急傾斜の大きな雪質の異状積雪量があつた事(3)富士山體の高度と斜面の廣大さが相當物を云つてゐると思う。

但し發生の主因は強風壓にあると思うが、最初の衝撃は何に加わつたか、現下の觀察者がいないので永久の謎が、今の處

(A) 澤の上部の吹溜り—即ち不安定な異状積雪—に六〇メートル近い突風様の風壓が急激に加わり、崩落したと云う説

(B) 上層の軟い新雪層が風でざらざら崩れ、それが擴大したと云う説

(C) 新雪中層が風で先づ破壊し、それが擴大したと云う説

(D) 南東風で出來た雪庇が北東風でかけて崩落し、その衝撃で下の積雪層が動き出したと云う説などがある。私は今の處A説を重く見ている。

(三)

次に遭難の原因であるが、以上述べた様に今回の雪崩は主として、東海道沖に十一月末としては珍らしい異状低気圧が發達し、このため富士山が異状の氣象狀況と氷雪状態におかれ、あつた異状の雪崩が出て、偶々登山隊がそ

の雪崩に遭遇したのであるが、その異状氣象狀況の内「低気圧中の弱風圈が登山朝方(七時附近から九時頃)丁度登山隊が五合目附近の宿舎から出發、發行開始頃富士山を通過した點」が大きな遭難原因をなしている。即ち山頂の平均風速は六時二十九メートル、七時十九メートル、八時十四メートル、九時十一メートルと下り、約三時間に亘つて風が落ちた。

この弱風圈は南東の強風圈から北東の強風圈に變る時に起つたもので、この弱風圈は普通三十分か一時間で通過して終うが、生憎低気圧が伊豆半島沖で停滯したため富士山は三時間以上も弱風圈内にはいつていた。この弱風圈通過前は山頂平均風速はいずれも三〇メートル内外(瞬間四〇メートル以上)なのだから、申腹もこれに準じた風速と推測出来る。從つてこの弱風圈が夜中に通過し、登山隊が出發する頃強風圈にはいつていたら、當然出發を見合わせたであらう。又出發時弱風圈にはいつていても、その時間が短かければたとえ出發しても餘り發行しない内に強風圈に入り登山を中止してゐたと思ふ。台風の強風圈で出港を見合わせていた洞爺丸の船長が偶々函館が弱風圈(台風的眼域)にはいつた夕刻青森に向つて出港し、次の強風圈で遭難した場合と今回の富士山登山隊が低気圧の弱風圈で行動を開始し、次の強風圈内で雪崩遭難した場合と類似の點がある。

(四)

以上の様に今回の遭難には客觀的の惡條件があつたが、主觀的に

も惡條件があつた。即登山隊は「初冬の富士山には雪崩はない」と思ひこんでいた事だ。勿論あれ程大きい初冬の雪崩は雪崩は前代未聞だが、從來小規模のものはあつた。十五年前に發表した私の「富士山の雪崩」と云う論文の中にも、春秋期にも湿潤新雪表層雪崩が出る事を記述し、その年月、發生箇所、觀測者名、寫眞を擧げている。又最近でも昭和二十四年十二月富士山南面大宮口六合附近で富士高校生一行が新雪表層雪崩を人工的に起し、二名重傷者が出ているが、これは「山と溪谷」昭和二十六年一月號に詳しく報告されている。併し初冬の富士山の雪崩文獻は少い上、富士山雪崩遭難者は從來皆無(但明治四十四年二月長谷川院一氏一名あるが、これも果して雪崩死か疲勞死か不明)なので、今回の登山隊の雪崩に對する關心は極めて薄かつた。從つて周囲の異状氣象狀況や氷雪状態に注意は向けられなかつたので、客觀的には「高度の雪崩發生危險状態」にはいつていたにも拘わらず、十分これを把握出來なかつた點がある。

併し全々異状を感じなかつたのではなく、現場にいた登歩溪流会の一行は、異状の積雪量と異状の気温上昇から直前には、雪崩の不安がある程度感知している。又全登山隊がいずれも大澤の直登を避け、夏道尾根筋を辿つてゐる事は澤の中の深雪ラッセルの勢を避けた以外、意識的にも無意識的にも何か不安を感じていた様に思われる。

小島鳥水先生を偲ぶ會

十二月十二日(日) 鳥水忠第三回還夜に際し神谷老の音頭で本會ルームに令息年太郎氏を招き鳥水先生を偲ぶ會が催された。師走にしては暖かく、語られる大先輩に關する話題はそれからそれへと展開され、今さら乍ら鳥水先生の幅と厚みと味のある山岳人としての人格が偲ばれ、時代が違ふとはいへ昨今の登山界に何かが缺けてゐるような思ひがしてならなかつた。

この會合に武田名譽會員がお差支えがあり又中村清太郎、東良三兩氏が日を間違えられ(翌十三日に御來臨)お話を伺へなかつたのは残念であつた。尚本席に神谷老がご持参になつた山岳鳥水記念獨特本「のを見返しに石井鶴三先生は「深山遊逸之圖」を監査し、參する一同何となく、結局この特製本はやがて神谷老より本會圖書室に御寄贈になることとなつた。(交野記)



専門店

東京都千代田區神田小川町3-16
電話 (25) 5851

芳賀スキー 東京支店



ヒマラヤン ノーツより

吉沢 一郎

★オーストリア隊による

チョー・オユーの登頂

Cho Oyu はエベレストの西々北二八杆に聳えるネパールとチベットの國境上にある山で、昔、インド測量局で測量していた當時は山名がわからなかつたので最初「T45」と呼び、後には「M1」と呼ばれていた。チョー・オユーという名稱はエベレストの一九二一年隊がチベット人から教わつたチベット名である。チョーというのには「神性」とか「悪魔」を意味するらしいが(チョーモルンマ、チョモラリ等) Oyu 又は Uyo というのはわからない(ディレンフルトの「第三の極へ」一五四頁参照)ディレンフルトは右の書で「比較的につて最も容易しい八千米級」(relativ „leichtester Achttausender“) といっているが、兎に角それは飽くまでも比較であつて困難の少ない場合の五千米や六千米級の山と違うことは當然

であらう。

方位の北緯二八度〇五分三二秒東經八六度三九分五一秒には問題がないものとしても、高度についてはインド測量局の二六七五〇呎(八一五三米)に對し、ディレンフルトは種々の資料から之を約八二〇〇米と考へてゐるようだ。そうなる七七一七二米のダウラーグリーを越えて世界の第六高峰となる譯である。

一九五一年のシプトン隊は東側のノジュンバ氷河の右俣(ヌブ峠に向うもの)を探つてゐる。一九五二年のシプトン隊はヒラリー、ロウ、セコード、グレゴリー、ボーディロン、エバンズ等を含めた十名の錚々たる登山家が之に挑んだにも拘らず、六八六〇米に達したのみで引返つてゐる。(A. J. May, 1953, No. 286 にエバンズの報告あり)寫眞をみてもわかる通り登路としては北側から北西稜にとりつゝのがいゝらしいとディレンフルトもいつてゐる。

次に今度の歐洲人三人、シエルパ七人よりなるオーストリア隊について述べよう。

1 隊長 Dr. Herbert Tichy (四一歳、地質學者) 彼は現在オーストリア山岳會海外遠征委員會委員とウィーン學士會部會の委員をやつてゐる。一九三六年にグルラ・マンダータ(七七二七米)へ行つたことは會報一七四號にも書いた通りであるが、その時彼は、人夫にして仲のいい友達でもあつたキタール(同年ナンダ・デヴィで死んだ、一九〇五年生れ)とた

つた二人で、五月中旬この山に挑み、頂下五〇〇米(約七二〇〇米)まで登つて深雪と寒氣のために引返してゐる。

最近私のところはスウェン・ヘディンの序文の載つてゐる彼の著「Zum Heiligsten Berg der Welt」——第四版(一九四六年)第一版は一九三七年——が着いたそれによるとティツヒイが着いたに試登し、カイラスを巡禮したのはウィーン大學生時代で、年は二十三歳であつたらしい。一九五三年の西ネパールの横断(サイパールの試登その他の初登頂を含む)については「Land der namenlosen Berge Durchquerung „Westnepals“ Ullstein, 1954 が出ている。

2 Sepp (Josef) Jochler (三一歳) Landeck-Junsbruck の土木技師、同所における有名な登山家一家の一人で、ナンガに一人で登つた(勿論途中から)ヘルマン・ブルとアイガーの北壁完登、エルンスト・ゼンとはマツターホ

ルンの北壁を完全に登つた豪の者で、後者については一九五四年の「Bergsteiger」三月號に素晴らしい寫眞と共に登攀記が載せられてゐる。

3 Dr. Hellmut Heuberger (三一歳) インスブルック大學地理學研究所々屬。

4 Pasang Dawa Lama (四三歳、最年長) ラサへ巡禮したことがあるのでラマといつてゐる。別名 Pasang Sherpa) 一九五〇年以前の山歴については H. J. Vol. XVI (1950-51) 参照、一年にはシプトンとエベレスト偵察、五年にはティツヒイと西ネパールへ、五四年にはアルゼンチン隊に備わつてダウラーグリーに行き同隊の最高到達點まで一緒にやつたという。タイガーである。

さて登山行動に移るが、登頂者は124の三人である。まだ詳細はわからないが、十月十八日七〇〇〇米にC4を設け、翌十九日陽が出るると直ぐに出發、七時間の登

攀の後に頂上についた。天氣は良かったし豫想通り技術的な困難はなかつたが、風と寒氣のひどいのは閉口する。ティツヒイとパサンは頂上の雪の中に神への献げものを埋め、イエックラーは母のくれた十字架を捧げ、最後にネパールとインドとオーストリアの國旗を立てる。滞頂三十分、直ちにC4に戻つた。ティツヒイとイエックラーは手足に凍傷をうけた。たとえ八千米級としてはやさしい山であつたとしても、酸素吸入器なしで頑張り通したということは特筆大書すべきである。因みに八千米級で登頂されたものとしてはアンナ、エベレスト、ナンガ、K2に次いで第五番目ということになる。

★スイス隊は二つとも失敗

スイス山岳研究連盟とジュネーヴ大學の後援の許にガウリサンカール(七一四四米)に出かけたレイモン・ランペールを隊長とし、クロード・コーガン J. C. Jude, 六頁4段目へ続く

—新着優秀スキー紹介—

★外国製スキー

エミール・アレーサイン入
フランス ロッシニオール
発売元

ノルウェイ エリクセン
スイス ライメックス
スイス アッテンフォアー
ノルウェイ グレスビック

★国産スキー

西沢 マーシュウエスト
小賀坂 白 鷹
直井 スワロー

登山とスキー具の専門店

好日山莊

東京・中央区・銀座西二ノ五
振替口座 東京113657 電話(56)3600

マリのこの本は、前記のディレンフルトのナンガと同時に上梓されたもので、エヴェレスト初登頂記をふくんでいる。獨譯者はリ・リックマース。

* Noyce, Wifrid: Triumph am Everest. Hamburg: Paul Zsolnay V. 1954. s. 384 D.M. 14.90.

サウス・コルへの道を開拓したノイスの〔サウス・コル〕の獨譯。

§ Harrer, Heinrich: Meine Tiber-Bilder. Chiemsee: Herring V. 1953. s. 232. 153 Bild. 9 Fab. D.M. 19.80

チベット風俗などを知るにはよい本だが、山のことは30頁しか書いていない。文章はハインツ・ヴォルテック博士が著述したもの。最近も近刊があるが山が書かれているかどうかわからないので略す。

* Schätz, J.-J.: Leuchtende Berge. Ein Farb-buch der Alpen. München: Bruckmann. 1954. s. 40. 32 Kunstdruck. D.M. 22.80

〔聖域ヒマラヤ〕を編集した著者の編集でおそらく絵畫集だと思う。

* Udet, Ernst: Ein Fliegerleben. Wien: Ullstein, 1954. s. 185. D.M. 7.80

山岳飛行家として有名なウデットの鳥人生活として興味あろう。

§ Eichelberg, Marc: Dza, dza-dem Himalaya zu. Zürich: Die Arche, 1953. s. 72. Sw. fr: 5.95.

1953年スイス・チューリッヒ學士山岳會のダウラギリ遠征の手記。日附も寫眞もないが、漫畫などがあつてユーモラスである。

* Tichy, Herbert: Land der namenlosen Berge.

Wien: Ullstein, 1954. D.M. 14.80.

ティヒー博士の名は10年も前から知っているが、この本は4人のシェルパをつれて西ネパールの初横断記録である。いうまでもなく博士は本年チオ・オユーに初登頂をしたから、この報告書も間もなく見られるであろう。

* Bau, Milli: Heilige Berge-Grüne Hölle. München: Ehrenwirth V. 1954. s. 248. 35 Foto. vom Hans Ertl. D.M. 12.80.

戦後はじめてのドイツのボリビヤ遠征に参加して三年間この地にとどまつた婦人の旅行という。

* Kruparz, Heinz: Shisha Pangma. Wien: V. Kremayr & Scherian, 1954. s. 192. 95 Bild (8Farb) D.M. 10.50

インド・ネパール・南チベット旅行の寫眞が主であるが題名のシシャ・パンマとは8000m峰で最下位のゴザインタンのチベット名である。ディレンフルトの〔第3の極〕でも1頁餘りしか記述していない山だが、ここでどれほどヴェールをぬいてくれるか注目したい。(1955・1・5)

山日記・1955年版

たいへん遅れて申譯ありませんが、1月20日やつと出来上りました。書店・運動具店・デパートなどにももう出ていますし、ルームにもありますから御求めの上本會内山日記編集室宛きたんなき御批評をお願い致します。

= 山日記編集委員一同 =

五頁5段目より続く
Zimmerman, Stenglein (後の二人は植物學者)を含む七人のスイス隊は、九月五日カトマンズに九月二十八日、ガウリサンカーの下の美しい湖水の傍らにBCを設け、同峰の登頂を試みるためその山の周圍を一周したが何處にも可能性を示すルートは見えなかつた。もつと裝備の完全な大部隊でなければ駄目だという。而もその間雨と降雪に悩まされつつか腐つてしまつて、今度は一九五一年にシブトン隊の通つたメンルン峠を超えてチョー・オユーに向つた。

之も詳細は不明であるが、兎に角BCを五六〇〇米、C3を六九〇〇米、C4を七〇〇〇米(之以上にテントを張ることは出来なかつた)に進め、最後の攻撃を十月の二十九日から三十日にやつた。が時期も遅く従つて天候も悪く、時間も不足していたので遂に不成功に終り、十一月二日(?)ナムチエ・バザールに戻つて來た。

然しこの際コーガン夫人(同氏について小生執筆の「岳人」最近號の「ヌーン登頂記」を参照され度し)は約七四〇まで登つて婦人としての登高記録を作つた。ランペールにいわせると彼女はヒマラヤ遠征隊の隊長になる充分の資格があるそうである。

★英國科學隊の活動
英國博物館(動物部)と王立園藝協會が後援した科學隊がアンナブルナとダウラギリ附近に前後七ヶ月間滞在して十一月十日カトマンズに歸つて來た。

隊長はL.S. Williams 隊員と

ついで W.R. Sykes (27), K.H. Hyatt (22), J.D. Stanton, J. Quinlan (昆蟲學者) 尚、メーリート大學の Pair 博士が夏期六週間だけ彼等と行動を共にした。新聞の報道するところによると彼等は「肉眼で見える」動物標本七千種「顕微鏡でなければ見えない」昆蟲その他の標本を多数(その中には蛇や蛙や哺乳動物がいる)を蒐めた。尚一行は皆で包んである種の植物を持つて來たが、之は Surrey にある王立園藝園で栽培してみる豫定だといつてゐる

★ドイツ隊
バルトロ氷河地帯に入つた例のヘルリツヒコーフアー隊はガシヤープルムIに失敗し、ブロード・ピークにはじめて登攀を試みたようである。が之ほどの程度か不明であり、頂上へは行けなかつたようである。尤も新しいルート(ディレンフルトの「バルトロ」に提案してある西稜以外のことか)を発見したということであるから一九五五年に捲土重来することになるのかも知れない。

ヘルマン・プー
八千米級の山々
(Achttausend drüber und drunter, Herman Buhl)
ミュンヘン、ニンヘンブルゲル書店、一九五四年
とにかくナンガバルバートという山に登つたプーはドイツ國民

圖書紹介

ドイツ語系の山の本

(3) 諏訪多榮藏

會報 168 號以後、筆者が入手したものと新刊とをお知らせしよう。

§ Herrigkoffer, Dr. Karl M., : Nanga Parbat 1953. München : Lehmanns, 1953. s. 192 DM. 16.80

§ ——— : Im Banne des Nanga Parbat

München : Lehmanns, 1953. s. 80. Kart. D.M. 7.20

この 2 冊はすでに會報で紹介された 1953 年のナンガ・バルバートの報告と寫真集で、邦譯、英譯 (54 年 11 月) 佛譯があるので詳説するまでもあるまい。ついでにナンガ・バルバート関係のものをまとめてみると、

§ Dyhrenfurth, G.O., : Das Buch vom Nanga Parbat München : Nymphenburger V. 1954 s. 200. D.M. 6.80

ディレンフルトの物語るナンガ登攀史小型の本で活字が大きく読みやすい。マンメリーからブルの初登頂までだが、初登頂のところが一番詳しい。144 頁のブルがビバークした地点とルートに入っているのはこの本だけでめづらしい。人夫や科學・映畫のこともちよつぱりつきたりがある。

§ Werner, Arthur : Weg und Ziel Nanga Parbat 1895-1953. Wien : V. f. Jugend und Volk, 1954. s. 173. D.M. 12.80

1932 年から 1953 年の登頂までを、山案内ハンス・ラインシュルの手記によるとしてしいる。こまごまとしたことも割合によくまとめている。

* Bauer, Paul : Das Ringen um den Nanga Parbat

1855-1953. München : Süddeutscher V. 1954. Nov. s. 250 96 Bild. D.M. 25.50

ドイツ・ヒマラヤ思想の父バウアーがものした、1856 年アドルフ・シュラーギントワイトのナンガ望見から、1953 年の登頂までをふくめた著述である。彼のヒマラヤへの情熱がいかに語られているか興味がある。

* Buhl, Hermann : 8000-Drüber und Drunter. München : Nymphenburger V. 1954. Nov.

Ca. 340 s. Ca. D.M. 15.80.

ナンガの單獨登頂者ブルの登頂記であるが、初期の山行も含んでいる。歸途の仲間割れなどが記されているそう期待している本の 1 つだ。英國、佛國、米國版が準備されているという。

* Viera, Josef S., : Mit Rudi Rott zum Nanga Parbat. Reutlingen : Ensslin und Laiblin V. 1954. s. 128. D.M. 4.20

ナンガへの浪人ルドルフ・ロットのヘルリヒコーフェル隊訪問記であろう。

* Hunt, John : Mount Everest. Kampf und Siege. Wien : Ullstein, 1954. s. 336. D.M. 15.80.

ハントのエヴェレスト登頂の獨譯。

* Everest : Ein Bildwerk. von Schweiz. Stift. f. Alp. Forsch. München : Nymphenburger V. 1953. 150 S. Bild. D.M. 28.00

1952 年スイス隊による春秋 2 回のエヴェレスト寫真集。この英國版は 1954 年 11 月に、英國のエヴェレスト寫真集とともに發行された。昔とちがつてドイツの本を買うよりも英國の方が 2 割方安い。

* Murray, W.H., : Das Buch von Everest. München : Nymphenburger V. 1953. s. 220 D.M. 6.80

この書名であるが drüber und drunter は前後とか程度ぐらいの軽い日本語に譯してよいであろうが、この言葉を逆にして drunter und drüber といえは、これはしたり、大さわざとか、上を下への大事件などという言葉に早變りするものである。だからドイツ人は書店でこの本の表紙を見せつけられて、大低「大さわざの八千人」ぐらいに直観して何の本だろうと手にとるのではなからうか。しかし書店の狙いは（ブルではなからう）八千米級のヒマラヤのジャイアンツが相ついで登られ、登られつつあるので、八千米級の山にも今までのようにのんびりと太平の世を樂しんでばかりはいられないというふうしをもっているのだから。事實この書のナンガバルバートの項目には Drunter... und Drüber ともつかわれてくるのである。まあともあれ、氣のきいた

いな世界の人々に知られてしまつた。とにかくヘルリヒコッファアが「ナンガバルバート、一九五三年」を公刊して、今ではもう數版を（私は二版までは讀んだ）かさねていくことであらうし、再版の端書に、彼ヘルリヒコッファアはこの書は英語、佛語、西語、ノルウェー語、日本語、そしてデンマーク語に譯されるはずであるといつていくくらいなのだから、その只一人の絶頂へ登つたブルの名は世界のスポーツライオンをあげせられていくことは事實である。それをなんでもジャイナリズムが見のがすべきや、ブル君はついに一書をものさせられたのである。それがこの書「八千米」なのである。

—ナイロン、麻、綿製—

各種テント、リュック、アノラック、

ザイル、スリーピングバックの専門店

三 喜 産 業

東京都千代田区大手町 2-4

電 和 田 倉 (20) 4810.4984.4985

題名であるといつてもよいのである。まづ巻頭にブルの美男子のポートレートが出て、端書にクンス・マイクス、勿論、ヘルマン・イルをはめている。本文に入つて最初は登山修業時代から初まり、北テロル、ドローミテン、冬のトレイニング、西アルプスの氷、などがあつて、最後にナンガバルバードが自傳的に山行を年を追つて述べられ、例のアタック前後起つたいやな事件をヘルリヒコッファアの「ナンガ五三年」より詳しくその経緯について述べている（三四頁の白部）とみて、山記として（三ツの白部）の讀み物で、ドイツ語、三ツの白部（原語、極地）とは別な意味で親しめる本である（小野幸）

ヒ・マ・ラ・ヤ流行

伊藤秀五郎

ヒマラヤが新聞小説の種になる御時勢が到来したとは同慶の至りである。新聞小説の熱心な讀者とはいえない僕も、朝日の「明日来る人」は興味深く讀んだ。初めの數回は讀み落したが、何げなく讀んだところに山の話が出ていたのでつられて讀み始めると、やがて動物學者が登場した。小説の本筋とは關係のないことでも、自分の畑のことは何となく氣になるものである。しかし山や動物のこともよく調べてあり、安心して讀めた。とくにカシカに關するところはうまく書いていて感心した。流れるような調子の文章もところどころつたし、減多にない小説だが、終りまで讀み通したのは小説として面白かつたからに違いない。ただ一つ、主人公の克平夫妻の心理的葛藤の堀り下げ方に物足りなさを感じた。玄人に言わせればあれでいいのかもしれないが、あの小説は二人がすでに不和になつてからの物語りであり、二人の間の過程はつきりしない。五人の主要人物の性格や特徴はそれぞれよく描かれていて、讀者の興味を中心は、彼らの關係がどう推移し、どういう結果を告げるかにあるのではあるが、しかし僕は、克平が、恵まれた環境に育つた教養のある美人、しかも人柄も物分りもいらいしい妻の八千代をなぜ愛

せなかつたのか、また八千代の方も、能力もあり人間としてもどこといつて缺點もないらしい克平をなぜ愛せなかつたのかその二人の心理がききたかつた。連想すれば分るだらうと言われても、想像力に乏しい僕などは困るのである。また肝心の克平の性格が他の人物ほどはつきりしないように思われるが、これは克平が作者の才筆をもつてしてもこなし難い人物であるからに違いない。素人の僕の推量では、作者の企圖は典型的な登山家を描くことにあつたらしいが、それが案外手剛い仕事なのだらう。世に山の絵は少くないが、山をほんとうにこなしした畫家といふのは恐らくホドラーぐらいのものであるまいか。山そのものが大きなドラマのようなものだからそれを繪にするにはよほどの修練が必要に違いない。そういう山をうろつく人間が登山家であるが、登山家という職業があるわけではなし、登山家らしい人間の創作は易しいことではないのかもしれない。克平に實在のモデルがあるのかどうか知らない。讀んだ感じでは、モデルとなつた特定の人物はなさそうな氣がする。もし假りに誰か實在の人物をモデルにしたら、外國人に例をとるならウインバーのごとき山岳人をモデルとするなら、もつと生き生きとした人物の實感がでる作品となるかもしれない。あの小説のテーマが、人間關係の在り方を描くことにあつて、山登りは一つの舞臺裝置に過ぎないならば、新聞小説としては成功作とみてよいであらう。克平夫婦に子供がなかつたり

初期のリュックサツク
に關するノート(二)

山崎 安治

◇ 劔岳八ツ峰登攀の記録

大正十二年の夏期計畫は北アルプスに九隊、南アルプスへ二隊、尾瀬、北海道などで、何れも連日の降雨にわざわざいされ難行を續けたようであるが、この日で一段と眼を引くのは劔岳八ツ峰初登攀の記録である。

メンバーは船田三郎、小笠原勇八、中林初太郎の三名、七月八日劔澤に幕營、雨のため十三日室堂へ退却し、二十四日まで降りこめられ、二十五日再び劔澤に幕營、八ツ峰への強い執着はようやくむくわれ、二十七日現在の五、六の鞍部から六峰と推定される一尖峰に攀じ初登攀の喜びを交しているリュックサツク第三號「八峰」の中で小笠原氏はこの時の模様を次のようにしるしている。

「劔澤の露營の朝、山崩れのような音に脅された七月二十七日、深い霧の中を劔岳の頂を越えて長次郎谷に下り、熊の岩より左に、八峰の最も大なるシャルテに近ずいて行つたのが午後二時、鋭い岩壁と底知れぬ深い谷、霧はすでにまいていて、シャルテにてアンザイレンレ八峰後半へのクレツテライを始めた。狭い岩塊の崩れ落ちる通路を見出して登る。それより急峻な岩壁となり、殊に細心な注意と、剛膽と、確實なるテヒニツクが必要であつた。岩壁は堅固であつた。そしてそれから傾斜がやや緩かとなり、八峰の一つのシュピツエに達したのは午後四時、小雨の中に悲壯な喜びを感じた。恵まれぬ天候、雨は岩壁の足場を不安定ならしめることを氣遣い止むなく引返さねばならなかつた。初めて八峰に攀じた夜は初めて見出した八峰下の露營地(現在の長次郎岩小舎)にザイルを解いて初登攀の忘れ難い強い意識を持つた」

更に翌日は五、六の鞍部から五峰に攀じた。

「翌二十八日、前日のシャルテより下のシュピツエに攀じて行つた。八時その頂に達し、長次郎谷を隔てた劔岳の壯大な景觀を得て歸路についたのである。なお取残された峰々に充れぬ思いを抱いて、それから長い間八峰は私にとつて忘れられないものとなつてしまつた」

次いで翌大正十三年七月小笠原勇八、藤田信道、近藤正、佐藤房忠の四氏により第二次劔岳生活が行われ、この岩壁を三回にかけて完登している。第一日は長次郎谷の右に入る二、三峰間のアイス・リンネより、二峰、一峰を経て最東端のピークに達した。

再び小笠原氏の報告から

「七月十四日、劔小舎より冷やかな晩の劔澤を下り、長次郎谷を登り、七時アイス・リンネより八峰へ攀じてゆく、二時間の後には第三峰に達することが出来た。これよりアンザイレンを、第二峰は北側を絡み、第一峰は南側の峻しい岩壁に胸を

すり合せて登り、十二時、八峰が劔澤に落ち込む最東端の高き峰へと達した。午後一時頂を辭し、狭い鋭稜を下り、第二峰との間の細いアイス・リンネを傳い、登路と合して長次郎谷に下り、夕暮の劔澤を歸つて行つた」

十八日は根據地を三峰下の長次郎岩小舎に移し、十九日前日のリンネから三、四、五峰と下半を全部登り、五、六の鞍部から岩小舎に歸る、當時は下半は七峰まで名稱を附したようである。

「十九日、七時半露營地を發ち第一日の行程と登路を同じく八峰の二日目の登攀を始めた。暁の太陽の輝き、われわれのグライトは青いエーテルの中に鋭く穿てている。硬い氷の面にシユタイグ・アイゼンの澄んだ音が響く、二日目の行程は八峰を半折するシャルテまで、或時は剃刀の齒のような鋭稜、或時はザイルを岩角に巻着けての下降と、峻しい幾つものシュピツエを越え、第七峰に達したのが十二時半、一時五十分には露營地に歸着することが出来た」

三日目は五、六の鞍部から八峰の頭まで登り、ここにこの岩塊の完登を記録した。上半には八峰から第十三峰までの名稱がつけられていて、

「二十日、三日目、今日こそ最後の峰に攀ずる日、六時露營地を發ち、七時岩壁を登り始めてより丹念な努力を續け半日の勞作を終えて正午初めて劔岳の頂より三窓に連る尾根に立つことが出来た。今は心平らかにこの高き頂に身をすり寄せて烈

離婚してもどちらも生活に困らないというような御膳立も、筋をスムーズに運ぶには都合がよくできている。しかしもし作者が、克平という人物に一つの人間タイプを彫むつもりであつたとしたら、その點に關する限り、作品は不出來であつたといふべきだろう。

餘計なことを書きすぎたようだが、あの小説にはどこかで聞いたような言葉がちよいちよい出る「君とは結婚以來の十年の馴染だが、山とは二十年來の附合だ」というようなセリフなども、よほど前に聞いた覚えがある。われわれ山仲間ではそんな冗談はとくに珍らしくもないが、それを實際に言つたのはウィットとユーモアに富んだ人だつたようだ。しかしあの小説では、受けとる方にシヨックを與えるようなシリアスな意味を持たせてある。それはとにかく、現實の問題として考えると、山に對する情熱と人間に對する愛情とは秤にかける性質のものではないような氣がする。人間に對する愛情は、人間の精神活動のうちの最高のものであるかどうかというようなことは暫くおき、少くとも外ものものでは置きかえられるものではない。山でも學問でもパチンコでも、何かに凝つたために人間に對する愛情が薄らぐということはないだろう。何かに熱中しているために人間に對する愛情が薄いという人は、もともと愛情の薄い人で、何かに熱中しなくとも同じである。人間に失望したり、失戀の痛手から、山が何かに彼のエネルギーのすべてを投入するということとはありそうなことだ。それに

よつて精神的償いを立られるかどうかは別問題だが。しかし、山が好きだから人間は嫌いだというのは筋が立たない。ほんとうは、山に無中になるほどの人は、おそらくそれ以上に人間を深く愛せる人に違いない。それが現實には、彼が交渉をもつ人間を愛せないという場合が往々にして起る。それは山のせいではない。八千代が山に嫉妬を感じたかどうか知らないが感じたとしてもそれは山の責任ではない。われわれの生れつきの容貌が自己の責任でないようなものだ。そんな詮議はこのくらいにしよう。肝心なのは、戀愛は年齢を問はずいくつになつても可能性はあるが、山のほうはそうはいかないといふことだ。遠くから山を眺めている分には差支えないが、登るとなると年と體力がものをいう。少くとも大きな山登りや激しい登山は老年にはできなくなる。山登りだけは若い時代の恵まれた機會を失わないことが賢明のようだ。その意味で、イギリスなどと違つて色々と制約の多い今の日本で、ヒマラヤに行けた克平は幸運といふべきだろう。妻とも離別し、愛人との縁もはなかつたが、山のほうは年來の夢があまり苦勞もなしに實現したらしいから、目的のカラコラムも恐らく樂に登つてくるに違いない。だが、花束を持つて出迎える人は誰か、作者でない僕には「その名は言えない」

(一九五四・一一・一〇)



しい登攀の後の平靜に胸をひたとかい抱く。心深く喜び、抑え切れない感激……」

なお八峰の完走は大正十二年七月船田氏の六峰登攀後學習院の岡部長量氏が佐伯八郎ら夫婦七名をつれて行つたといわれるがこの記録はみていない。また現在の八ツ峰の八峰までの名稱を附してこれを詳細に報告したのは三高山岳部報告第五號の高橋建治氏による「八峰源治郎尾根」と思うのだが、いまこれが手もとに無いので、はつきりしたことはいえない。

◆嚴冬の槍ヶ岳登攀の記録

最冬の槍ヶ岳は大正十三年一月六日、船田三郎、小笠原勇八、麻生武治の三氏によつて初登攀された。一月三日上高地五千尺より槍澤小屋へ根據地を移し、二日間風雪のため停滯、六日なごやから青空のもとに九時槍澤小屋を出發、三時間の登行後殺生小屋をスキー・デポとした。二時五十分槍の肩につく。

「そこから覗き眺められる涯もなき雪の嶺を確と眼に止むる間もなく、飛驒側から吹上げる物凄く氷粒の激しい亂打、打撃に遭わねばならなかつた(中略)岩壁にて三十米のザイルは素早く三人の體をただ一つのものに結びつけてしまふ。これより頂までの全き氷と岩の範圍はピツケルとザイルを用いてのクレツテライになるのである。氷は花の如く、沫の如く、岩壁に固着したまま削磨せられた氷壁となり永遠の存在を誇示している。この絶大無限の存在に對してクレツテライの持つすべての力が凝

固し、半時間餘の登高は序々に確實な手懸り足懸りを求めて遂に、三三八〇米の高き頂に三人の感激はその至高に波立つた(三・三〇)頂をめぐる雪の數限りなき山々は落日の赤いくるめきを受け、粉雪の飛散、亂斗に悶えその動的な勢威に燃えている」

小笠原氏は三號の「一月の槍ヶ岳」の中で以上のように述べている。肩まで降つてザイルを解き、殺生のデポからスキーに代へ五時三十分槍澤小屋に歸着した。更にこの三月再びこの頂に立つた小笠原氏は一月の登攀と比較して次のように書いています。

「頂は三月にはまだ雪があつた。一月には固い氷の中に小宇は半ば埋れてゐた。既に三月の日の温度は高い。そして太陽の作用によるクルステの變化は著しい。人々は雪の上に寝そべつて安逸な數時間を山上に送ることが出来る。しかし一月の山はこれらのすべてを拒否する。それは激烈な寒氣であり、刺すように痛く氷粒の亂打である。しかし、これらのあらゆるものが皆山人の求むる生命への精進である。私はその極限へ向つての擴大の歡喜を三月、五月の槍よりも一月のそれに、より一層力強く求めることが出来た」

(つづく)

白樺山莊

都内の山小屋 庭の白樺林
展望可交通便 地圖案内呈
登山家の會合 簡易宿泊に
澁谷區代々木 山谷二三三
京王初臺三分 廣瀬潔邸内

スキー用品

東京・新宿駅前

かずみ

TEL (35) 2959・6711

たかはら

人気質の店

本店、四谷、大蔵省横入
TEL. (35) 1912

支店 八重州口第2鉄鋼ビル前
TEL 07 1560

芦別岳の遭難事件

★

橋本誠二

昭和二十七年の出来事だから、大分舊聞に属するのだが、北海道芦別岳に登山した高校の教官一人生徒六人の一隊が道に迷ったあげく岩壁に入りこみ、生徒二人が相次いで墜死した事件があつた。話がこまめであれば人から忘れられもしようが、今日でもなお事件が深刻に根を残しているというのはこの関係教官が過失傷害致死被告として起訴されたからである。

事件の審議にあたり、現場の様子、登山隊の措置・対策などの点につき、登山家の鑑定が必要になり、小樽山岳會一原有徳氏と私に依頼があつた。

遭難事件関係者の起訴というのはマッターホルン以来聞いたことがない。これは登山者の立場でも深刻な問題であるし、山岳會としても慎重に考慮しなければならぬことでもある。これは私の手におえぬ難事とは思われたが、山崎春雄先生、加納一郎さんまた諸先輩の御意見を伺い、更に兩人で意見をとりかわした結果あえて検証に参加した。

芦別岳は一七七二米、夕張山脈のほぼ中央にあつて、富良野盆地をへだて十勝岳と向いあつている札幌を終列車で發てば翌朝登山口の山部驛につき、頂上に登つても午後の列車に間にあい、その日のうちに歸られるというのでシーズ

ン中は非常に賑う。アプローチの點ばかりでなく、一般にだらりとした北海道の山の中で峻しくそそりたつ山容もこの山の魅力なのだろう。

登山道は二本ある。一つは新道といわれ、よく整備されている。その二は舊道とよばれる。この道は芦別岳北面の峻しい谷(地獄谷)に暫らくそい、地獄谷の悪場をさけて左岸のユフレ澤に入り、あとは尾根傳いに地獄谷を大まわりする。地獄谷には道はないが、澤頭に標高差三〇〇米以上もある岩場があるので熟練者はしばしば選んでいる。

従つてこの山は初心者にも、熟練者にもむいているといえる譯である。だから初心者が迷つたりすると難かしい岩場にぶつかる可能性が充分にあることになる。

こういう色々な點から上越の谷川岳に似ているといえると思う。なお付加えておかねばならぬことにこの山の地形圖が非常に誤つていることがある。ことに頂上近くから地獄谷一帯にかけて間違ひが著しい。しかし登山道をたどるだけであれば迷うおそれもないので、一般には問題にもまわっていないかつた様である。

遭難事件當時、舊道は全く整備されておらずにすつかり掩われていた。それにもかからず登山指導標は新舊兩コースが整つていた時のままに、驛前にたてられて存在するのである。遭難した一行は六月二十八日、舊道から残雪の

多い芦別岳に登ろうとした。この一行は新道からは何回かの経験はあるが、舊道ではじめてである。日歸りの豫定だが一泊できる程度の用意はあつた。舊道が荒れていることを知っていたからであらう地元で説明もうけている。ところがその案内のなかにあまい表現もあつたようである。一行はユフレ澤の出會を誤認し地獄谷に入つてしまつた。悪いことにはこの分岐の少し上流で地獄谷にその路跡(舊道ではない)を見つけた。これを舊道と信じてしまつたのである。

地獄谷に入つて間もなく滝がある。この滝の左岸の大岩壁が事故の現場である。事件の當時、滝の下手から雪渓がはじまつていた。私共が現場検証に行つた際(翌年六月二十八日)にも雪渓の様子は當時の状態と殆んど同じであつた。私達の召喚状に、何號法廷を消して、現場岩壁下へ出頭相成度とあつたとおり、その雪渓につくと形どおり、その尋問があつた。もつともその尋問や宣誓の最中に裁判長がスリッパされたのは、形式の中に入らぬことだろう。

現場検証は當時と全く同じルートをとるように行われることになり、一原氏、被告、私の順にアンザイレンして岩壁に登つた。當時岩壁上から投げすてたルツクサツクなどが發見されたことなどは被告に大きな精神的ショックを與えた様子であつて、私達は彼をザイルからはづし、安全なところに残るようすすめて、二人だけで登つたのである。

この岩壁は雪渓から真正面に高

く仰がれるものであるが、當時一行のうち一人として気づいている者もない。というのは一行は雪渓がわれるのではあるまいかとの懸念で、足下に注意を集中していたらしい。もしこの岩場を見ていたならば、ここに迷ひこむことはまづなかつたに違いない。だが一行は滝を左岸からまき、降り口の急斜面(實際は大したことはない)を極端に警戒して、そのまゝ高く登つていつたのである。一行の證言からは、高きまきはじめるところで、舊道の分岐は通りこしてしまつたからそのまま登つて尾根にでると舊道に當るに違いないと生徒の一人が主張しリードしたことが明らかにされている。

この邊りは急斜面ではあるが、大きな木も生え、その上部にはブツシュの密生した急斜面がつづく。そしてこのブツシュにつかまつて登つてゆくと、岩壁の思いがけぬ高みにひよいと出るのである。その邊りは相當に悪いところもあるが、こゝまで登ると岩壁最上部はすぐ眼の前にみえる。實はこのようにみえるのは錯覚が大いに働らくからである。岩壁の最上部にはひどいオーバーハングがあり、その下にコンベックスな岩場がある。コンベックスな岩場の一番張りだしたところは、やぶの消えるところから二〇米はない。ここから見上げるとその張りだしたとオーバーハングの一番上(えぞ松の森)とがちょうど重なりあい、オーバーハングは見えない。

三人目にリーダーともいうべき生徒が續き、彼がまづ轉落した。この事故で一行は進退きわまつたがサブリーダーが岩壁を登りきつて危地を逃れることを主張し、教官が上にいる二人の位置まで登りサブリーダーが續いたのだが、彼もまた墜死してしまつた。その地點は二人とも同じところで岩壁下より標高差にして七〇米である。

他の二人は岩壁の中途にいたが辛うじて降り急をしろせ、翌朝オーバーハングにいる三人が救出されたのであつた。

私達はこのような現場の状態を見とけてから岩場を降つた。

この事故が登山に對する経験と智識の不足から起つてゐることは改めて述べるまでもない。

(つづく)



NYLON TENT

高所用露営天幕
登山とスキー用具

千代田区神田 須田町 2-23 細野商店 電話 (25) 6428

會務報告

十一月理事會十日（水）於ルーム

出席者 榎會長、日高副會長、理事、成瀬、渡邊、小原、金坂、交野、沼倉、折井、吉阪、外山、監事、石原、加藤（泰）、常任評議員、沼井、岩永、別宮、神谷

議事 一、全岳連問題並びに國體委員會組織に關する接洽経過報告 榎二、次回マナスル登山隊派遣に關する件

十一月役員總會（兼臨時評議員會）二十四日（水）於ルーム 出席者 榎會長、松方副會長、理事、成瀬、小原、渡邊、金坂、交野、折井、吉阪、今村、評議員堀田、竹郎、別宮、沼井、神谷、篠田、村井 近藤名譽會員

議事 一、一九五五年度マナスル登山隊長決定に關する件 理事會に選衡方法の決定を一任し、右より會長、兩副會長にて隊長を決定することに決定

二、五十周年記念事業計畫概要、模範 祝典舉行、山岳五十周年記念號に五十年史掲載、記念講演會及び記念登山、書庫の建設

臨時理事會 十一月二十七日（土）於ルーム 出席者 榎會長、理事成瀬、小原、金坂、交野、初見、今村、吉阪、常任評議員、沼井、神谷

議事 一、次回マナスル登山隊長選衡方法に關する件 會長、兩副會長に依る隊長決定に際し左記を參考とせられ度き

こと

（一）理事、監事、評議員、各支部長、名譽會員、前三回マナスル登山隊員、各ヒマラヤ委員會委員長、其他會長、副會長が必要と認むる關係者より文書をもつて會長宛に候補者の推薦を求むること

（二）一九五四年度マナスル登山檢討會記録並びに一九五三年度各隊員より三田隊長宛提出の報告書

十二月理事會 八日（水）於ルーム 出席者 榎會長、日高、松方、副會長、理事、成瀬、渡邊、金坂、交野、沼倉、初見、折井、外山、今村、常任評議員、神谷、沼井、岩永、監事、石原、（林和夫）

議事 一、理事會の開會方法の件 月頭に於ける常務理事會の議案審議を廢止し理事會一本立として審議することに改正することに決定

二、富士山雪崩遭難事故報告 現場の狀況及び搜索 金坂 三大學遭難對策綜合本部の經過 初見 現地視察報告 林 遭難事故に對する本會の處置 榎

三、慶應高校生丹澤遭難事故 榎 四、富士山雪崩遭難事故の對策 松方

一月役員總會 十二日（水）於ルーム 出席者 榎會長、松方、日高副會長、理事、成瀬、渡邊、小原、

金坂、交野、折井、初見、千谷、外山、沼倉、評議員、神谷、沼井、辻、三田、岩永、竹節、村井、監事、石原、加藤（泰）

議事 一、次回マナスル登山隊長決定に關する件 二、一九五四年度マナスル登山隊經費處理報告 成瀬 三、昭和卅年度體協關係役員選出の件

從來通り評議員に入澤文明、國體委員に渡邊公平兩氏を決定 四、國體委員會組織準備委員會經過報告 渡邊

尚本役員總會に於いて東京支部（杉本理事長、星野、野田、坂倉各理事、山下評議員出席）より從來國體參加に際し東京都山岳會名を用いていたが、今回東京都山岳連盟結成に際し東京都山岳會を解消し東京支部有志をもつて別の組織をつくり新生する東京都山岳連盟に加盟する案につき説明あり

圖書基金寄附（敬稱略）

マ參百圓 藤原國隆
マ壹百圓 生駒高常
累計金壹萬七千五百圓
マナスル基金芳名（敬稱略）
貳千圓 羚羊山岳會
累計金八萬四千五百八拾圓

年次晚餐會に出席して

終戦後今の山岳會ルームが出来た年の秋か或はその翌年の正月頃の未だ寒い頃であつたと思うが松方氏を中心に、そろそろ又有志晚餐會でもやろうかと云う話が急速に實現して、確かルームで各自食器持参でスキ焼をやつたのが戦後初の所謂「有志晚餐會」らしい「有志晚餐會」ではなかつたらうか。兎に角、一應皆の集るルームも出来たし、それとなく氣分的にもそろそろ昔の清水谷時代、つかさの時代、虎ノ門時代への懐古的氣分が暗々裡に持ち上つて來たのがこの會の復活の端緒となつたのである。

約三十人足らずの集りであつたその日は寒い日で、田部重治さんがスキー帽を冠つて來られたのと何十年振りで近藤さんに御目に掛れたりのので當日の印象は忘れ難いものであつた。それ以來、この傳統ある晚餐會も復活、毎年續けられ、今年は十一月二十五日（木曜日）昨年同様虎ノ門、東京俱樂部で行われた。

東京俱樂部はその建物を見ても判る様に、英國式の古いクラブで仲々由緒あるクラブであり、近藤名譽會員等も夙にこのクラブの會員として重きをなされ、現在では長老級である。

且ては英國山岳會副會長として又ヒマラヤの先覺者の一人として又、アルパイン・クラブ・レヂスターの著者として我々には特にその名も床しきマムさん（A.L. MUMM）が來京の折、ケンブリッヂ時代の學友である當時の駐日英大使チャールス・エリオット卿や近藤さんとこの東京俱樂部に屢々足を運ばれた事があるので、此處を二年も續けて會場にした理由でもないが、場所柄靜かなクラブとして本會の年次晚餐會場としては恰好のような氣をする。

當日はあいにくの雨天で長老連の御出席は如何かと案じたが、そんな事は杞憂で、中村、冠、鳥山、田部、榎、武田、高野、近藤と名譽會員の超下級を圍む事が出来た殊に今春以來、健康勝れじと、御手紙をいたゞいて私に案じていた田部さんの御出席あつた事は我々にとって何より喜ばしき事であつた。

私は且て、アルパイン・クラブ